



~感性を磨く、感動を見つける~
Enjoy!+α
Arts & Entertainment α
ほんの少しの好奇心と最初の一步を踏み出す勇気—
扉の向こうにあなたの知らない素敵な世界が広がります

CONTENTS

Enjoy!+α Arts & Entertainment	
未知なる音楽の旅! 作曲の秘密を探る	01
天才型か、苦悩型か… そして、名曲は生まれた	
Special対談 若林千春さん × 中村典子さん ベールに隠された作曲家の素顔に迫る	
KEIBUN友の会会員特典のご案内 イベント/シネマ/アート/スポーツ/ ゴルフ/旅行/レジャー/健康/ カルチャー/グルメ	07
プレゼント/Reader's Letters	25

未知なる音楽の旅! 作曲の秘密を探る

ドビュッシー曰く「言葉で表現できなくなったとき、音楽が始まる」。作曲の秘密をその言葉で解き明かそうとするのは愚の骨頂なのかも…。ただ、楽譜には音楽家のひらめきや苦悩の跡がしるされ、さまざまな物語が読み取れる。音楽家の置かれた境遇やその姿に自身を投影し、作品を追体験してみると、新たな発見があるかもしれない。



今月の表紙



あなたはわかりますか?
謎 解き×世界遺産

岩間に見える遺跡は
バラ色の蜃気楼か!?



ペトラ(ヨルダン・1985年登録)



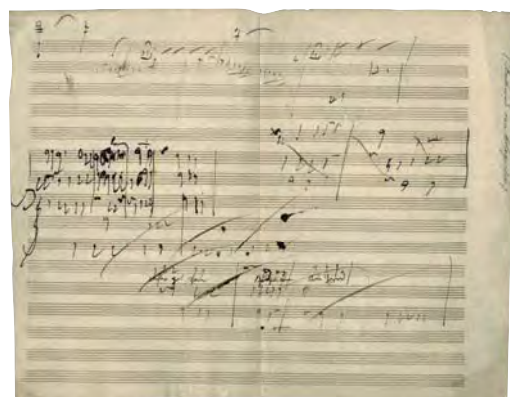
ペトラ遺跡のエル・カズネ(宝物殿)

暗くて狭い岩の裂け目の向こうに見える建物は、断崖に刻まれた巨大なエル・カズネ(宝物殿)。中東ヨルダンのペトラを象徴する遺跡のひとつだ。訪問者は砂岩の亀裂によって生じた“シーク”と呼ばれる隙間を進まなければならないので、宝物を探し出すような冒険心にくすぐられる。映画『インディ・ジョーンズ/最後の聖戦』のロケ地としても知られる。

あったベートーヴェンは実に恋多き男で、ピアノ・ソナタ「月光」も彼が愛した伯爵令嬢に献呈されたもの。いずれも狂おしいまでの恋慕が感じられる美しくも哀しい旋律である。

名曲の多くには、このように作曲家自身の人生観や思想、折々の心の動きが少なからず投影されている。祖国への思いを込めてつくられた曲も多い。

チェコの国民音楽の始祖といわれるスメタナが祖国の歴史や自然を称えた連作交響詩「わが祖国」をはじめ、アメリカ在住時代に故郷ボヘミアへの慕情を表現したドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」、ロシアの圧政に苦しむフィンランドを鼓舞するためにつくられたシベリウスの交響詩「フィンランディア」などは有名だ。ポーランド出身のショパンのピアノ曲には、祖国の舞曲マズルカやポロネーズをモチーフにした曲も多く、自ら



ベートーヴェンの自筆譜(ピアノ・ソナタ第28番第3楽章の一部)

誰も聴いたことがない
未知の音楽との遭遇!

のアイデンティティを追い求めたもので、聴く者の郷愁を誘う。

20世紀になると作曲家の冒険がはじまる。いわゆる現代音楽である。調性の概念から脱却した音楽が台頭し、ジョン・ケージの「4分33秒」のような実験的な作品も登場。この曲の譜面には3楽章すべてに「T A C E T (長い休み)」とされるされ、演奏者は無音を表現する。既成概念を壊す、自由で混沌とした表現が評価された。邦楽器とオーケストラによる「ノヴェンバー・ステップス」で世界的に名を馳せた武満徹も日本を代表する作曲家だが、映画音楽やポップスなど活躍分野は多岐にわたり、その独創的な音づくりは世界的に高く評価された。

そして21世紀、作曲の可能性を探る旅は続く。プログラミングブロックのオーケス



©Yuji Hori

びわ湖ホール公演「THE PIANIST」に出演する辻井伸行(詳細は9ページ)

そして、名曲は生まれた



(左)死後に想像で描かれたというモーツァルトの肖像(バー(ラ)クラフト作) (右)「ミサ・ソレムニス」を作曲するベートーヴェンの肖像(ヨーゼフ・シュティラー作)

作曲は天賦の才?!
楽譜にしろされた物語

映画「アマデウス」(1984年公開)の一場面、謎の人物から依頼されたレクイエムが書きあがらずにいるモーツァルトに、オペラの作曲を依頼した友人が「楽譜はどこにあるんだ」と詰めると、彼は自分の頭を指して「ここに」とやり。天才モーツァルトを表す印象的なシーンである。モーツァルトは、5歳から作曲をはじめ、35歳という短い生涯の中で800曲以上の作品を残している。神童「天才」と称された彼のスコアには、書き直しがほとんどなかったともいわれている。

「天から曲が降りてくる」とよく言われるが、無から有を生む「作曲」という行為は、神の領域に近い。モーツァルトのように、天賦の才をもつ作曲家たちは、頭の中に完成された音楽が現れ、それを譜面にしるすのみなのだと思いがちだが、けつしてそうではない。

晩年、聴力を失いながらも、「第九」をはじめとする多くの名曲を世に送り出したベートーヴェンは、苦悩タイプの典型だ。楽想が湧きあがると、試行錯誤を繰り返しながら、何度も推敲に推敲を重ね、寝食を忘れるほど作曲に没頭したという。努力も一つの才能なのだろう。交響曲第5番「運命」の自筆譜も、さんざん書

トラ版や大河ドラマの音楽も手がけるなど活躍が目覚ましい吉松隆をはじめ、ロンドンを拠点に活躍する藤倉大、昨年のジュネーブ国際コンクール作曲部門で優勝した藪田翔一など、将来有望な若手作曲家にも注目したい。

クラシック音楽も、作曲された当時は(新曲)であり、誰も聴いたことがない未知の音楽だった。その音楽に初めて遭遇した聴衆の驚きと感動はどうであったか。作曲の技法やスタイルが大きく変わっても、いま生きる作曲家たちによって生み出される同時代の音楽は、やはり驚きと感動に満ちている。その至福の出会いには私たちにもきつと訪れるだろう。

昔も今もピアノは
作曲に不可欠なツール

コンピューターの進歩とソフトウェアの充実により、誰もが簡単に創作に取り組める環境にはなったが、作曲の道具として最も有効な楽器はやはりピアノだろう。モーツァルトやベートーヴェンも処女作はピアノ曲を書いている。ショパンやリストの時代は作曲家が独奏者を兼ねることも多く、自らのテクニックや作品の魅力を披露するために、さまざまな新しい曲を生み出していた。



モーツァルトの自筆譜(弦楽四重奏曲第19番「不協和音」)

愛する人への思い
祖国への慕情...

ベートーヴェンの自筆譜が物語るエピソードがもう一つある。

有名なピアノ曲の小品「エリーゼのために」は、楽譜に「エリーゼの思い出のために」とメモされていたことから後についた表題だが、このエリーゼという女性が誰なのか、長年の謎だった。ベートーヴェンの自筆譜は写譜師泣かせの悪筆で、近年になって当時ベートーヴェンが求婚して断られた「テレゼ」の名を読み間違ったのではないかという説が有力。生涯独身で

左手で鍵盤を叩き、右手で音符を書きしるす。演奏しながら楽譜を書く作業は、他の楽器ではまず不可能だろう。メロディー(旋律)、リズム(律動)、ハーモニー(和声)を一つの楽器で表現できることも大きい。また、ピアノは音域が広いので、オーケストラに使われる多くの楽器の音域もカバーできる。

7月にびわ湖ホール大ホールで公演される「THE P I A N I S T!」では、作曲家としても活躍する3組の人気ピアニスト(辻井伸行、加古隆、レフレイル)が登場する。映画やドラマ、テレビ番組など映像作品との出会いから生まれた名曲から、オリジナルティあふれる意欲作まで、それぞれのテクニックはもちろん、作曲家としての感性、音楽性をたっぷり満喫してみよう。

時代別にみたクラシック音楽の作曲家像

バロック(17世紀初頭~18世紀半ば)

この時代の音楽家は宮廷のお抱えで、王侯貴族が自分たちの楽しみのために音楽をつくらせていた。形式は室内楽が中心で、パッサリなどは即興演奏の延長線上に作曲行為があったといえる。

古典派(18世紀後半~19世紀初頭)

貴族をバトロンにしながらも、音楽家としての地位が徐々に確立。音楽も貴族のためのものから作曲家自身を投影するものに変わっていった。この時代に交響曲、協奏曲などが盛んにつくられた。

ロマン派(19世紀)

フランス革命以降、音楽家はフリーランスの職業となり、音楽出版社と契約し、作曲・演奏活動を続ける。音楽家の世界観や思想を反映した作品、民族主義的な音楽が生まれていく。